

チェンマイ大学での貢献 (29)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

2016年2月20日午後6時から、チェンマイ大学の日本研究センターにおいてラナ・日本祭 (Lanna - Japan Festival) が開催された。またこの行事に合わせて日本側から研究センターの改修引き渡しセレモニーが行われた。事前に工学部の国際交流課より案内のチラシを頂いていたが、文系の建物なのでこれまで訪れたことはあったが所在の場所についての記憶が定かではなかった。土曜日ということもあって、まずは朝早くから自転車で現地の場所の確認をしておいたほうが夕刻にスムーズにその場所に行くことが出来ると判断し出向いた。土曜日で人影は殆ど無く場所の確認をしようにも尋ねる相手が見つからない。この辺であったという記憶を頼りにその辺りを2、3度うろついていると、1台の車がやってきて駐車したので、すかさずドアを開けて降りてきた人に尋ねると、もう少し向こうだと言って教えてくれた。その説明に従い、移動するがなかなか確認ができない。教えられた人文学部の建物の事務所で再度尋ねると女性の方が「この道を降りたあの建物だ」と言って指示してくれたのが日本研究センターの建物であった。周りにはミャンマーやラオス、カンボディア、韓国など周辺各国の同様の研究センターが位置し「なるほど、ここに同様の建物が一同に集められているのだ」と言う事がわかった。しかし相変わらず場所の確認ができるまでは本来の目的を達成できないので、日本研究センターの前あたりをウロウロしていると、一人の若い女性が「伊藤先生」と言って声をかけてきた。「今夕の催しのことで来られたのですか？それならばこの建物ではなく、前にある道の向かい側の広場が会場です。」と言って教えてくれた。その女性は同研究センターで働いている教員のようで、筆者の記憶も定かではなかったが、そんなことより本来の目的である行事の開催場所の確認ができたことに安堵してホッとした。在チェンマイ日本総領事館から頂いた連絡でも日本研究センターではなく、その前の広場での開催と言うことが送信されたメールには書かれていたので、再確認できたとあらためて安堵し夕刻の参加に備えた。ここで嬉しいことは筆者に記憶がなくても専門の異なる人文系の教職員が筆者を知ってくれたことである。夕刻までの時間を余裕を持ってショッピングに当てた。17時30分に、朝確認した場所に出向くと既に道路混雑の回避や駐車場の整理のために担当のガイドが来訪者に的確な指示を与えていた。「自転車ならばこの辺に駐車するのが良いので、もう少し入ってください」との指示に基づきその場所に自転車を置き、会場である野外広場に入った。舞台や照明装置が設置され、色とりどりの飾り付けがされ、周辺には日本とタイの食文化の比較ができるように各所に食べ物販売のブースがあった。その一角には日本研究センターの院生の研究がポスターで紹介されており、担当の学生がその前で要請に応じて研究内容を説明してくれた。説明によると修士課程において2つのコースがあり、個別研究 (IS, Independent

Study) では、課程修了において必ずしも欧文による刊行掲載論文は必要ではないが、必要とするコースでは 1 編の掲載論文が必要ということであった。ポスターを展示している学生に尋ねると明治天皇、大正天皇と山県有朋、原敬について研究しているという。文献を読むには難しい日本語、特に漢字が読めないと困るが、どうですかと尋ねると「仰るとおりです。難しいですが自分にはできます」との返事が頼もしかった。そうこうしていると、かつての工学部長であり、また最近まで副学長であった先生に会うことができた。「日本政府側から研究センターへの改修引き渡し式典があると聞いていたので、ネクタイと背広の公式の服装でやって来たが、それらしき行事が行われる気配がない」と切り出すと、「ここではなくセンターの建物内で行われるのでそちらに行け。学長をはじめ要職にある人々はまだそこにいる」と聞き、駆けつけると式典は終わっていて雑談が続いているようであった。日本総領事もおられ挨拶をすることができた。日頃から「在外公館にはできるだけ迷惑をかけない、かけることがあってはならない」との心得から招待や要請が有るときに限り、喜んで応じるがそれ以外はできるだけ距離を置くと言うのが筆者のスタンスなので、総領事にお会いするのもその時が初めてであった。その場に居合わせたチェンマイ大学の学長、副学長をはじめとする要人の殆どを筆者が熟知の仲であることに総領事もいささか驚きの表情であるかにも見えた。しばらくして野外会場に場所を移し、次々と行われる幾つかの交流イベントを楽しんだ。やがて 8 時を過ぎプログラムが消化し自転車を置いた場所に向かう出口で、若い学生の一人が「伊藤先生、私は工学部の機械工学の学生です。貴方をよく存じています」と言って声をかけて来た。筆者は一人ひとりの学生を知っているわけではないが、その親しげな話しかけに親近感と嬉しさを感じた。「チェンマイ大学で教えていてよかった」とあらためて感じた一瞬であった。

さて、その翌日の夕刻から先端プラズマ工学とその応用、特に農業、バイオ、医学への応用に関する第 2 回 アジア国際ワークショップ (The 2nd Asian International Workshop on Advanced Plasma Technology and Application, Major Topics: Plasma Technology for Agriculture, Bio and Medicine, 21 - 23 February, 2016) が始まり、旧知の友人がベトナムからやってきた。ほぼ 20 年を超える交流の関係から最近では年に 2~3 回の頻度で相互に顔を合わせている。そもそもチェンマイ大学工学部がベトナムのノンラン大学との間で関係を強化した背景には少なからず筆者が学長との間で長年の信頼感を築き、紹介し、今日の関係に至った経緯がある。この事も筆者にとっては嬉しい限りであり、自慢できる貢献の一つでもある。21 日の夕刻には海外からの参加者と主催側のチェンマイ大学との夕食会で隣り合わせた客人との間で相互紹介と名刺交換が行われた。向かいの席に座った若者に「貴方はどこの方ですか、以前にお会いしましたか、また既に名刺交換はしましたでしょうか」と尋ねると「いいえ」と言う返事であった。しからば「私を知っていますか」と尋ねると、しばらく間を置いて「伊藤教授ではないでしょうか」と言う返事が帰ってきた。よくよく聞いてみると彼はチェンマイ大学の理学部の教員で、博士号は日本の東北大学で、文部省奨学金を頂いて取得したと言う。筆者も理学部には知らない人がいないわけではな

い。最近では知人も増えつつ有る。そうした中で自分を知る若者がいることの感激と感動は加齢する老体をムチ打ち、筆舌を超える励ましと勇気を与えてくれる。まさに「生きてる現実の喜び」を感じるヒトコマでも有る。



図1 Lanna - Japan Festival, 舞台（左）と盆踊り広場（右）



図2 プラズマ・テクノロジーワークショップ： 講演会（左）と昼食の一卓（右）